詩の広場

刹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
詩の広場

【Ｎコード】
Ｎ４４２２Ｎ

【作者名】
刹音

【あらすじ】
小さな詩。詩とか下手ですがお暇なときにでもどうぞ。

溶かして

冬の夜空は綺麗なほど残酷
貴方との暖かかった思い出までも
あっと言う間に凍らせてしまう
凍ってしまった思い出は
暖かさを取り戻す術をもたず
寂しさと言う名の霜がつく

冬の夜空は美しいほど残酷
思い出だけでは飽き足らず
貴方と交わした言葉でさえも
いとも簡単に凍らせてしまう
凍ってしまった言葉は
もう貴方には届かない
仮に届いたとしても

それは互いを傷つける刃となるだけ

凍った言葉を溶かしてください

暖かい私の言葉を貴方に届けたいのです

凍った思い出を溶かしてください

暖かかったあの頃の思い出を感じたいのです

小さな出会い

小さなサヨナサがつながっている人生

大きなサヨナラに押しつぶされてしまった人生

たくさんの人生の中で

たくさんの別れを繰り返す

別れることに疲れて

出会うことを嫌ってしまったあなた

気づいてください

感じてください

たくさんの人生の中の

たくさんの別れの後には

必ず小さな出会いが芽を出しているのです

出会うことを嫌って

芽を踏まないでください

芽を摘まないでください

あなたは知っていますか？

塞ぎこんでしまったあなたの傍らに

小さな出会いが芽を出しているのを・・・

サヨナラ

「サヨナラ」
貴方の口から漏れた
そのたった四文字が
私の心の奥深くに
重たくのしかかっています
辛さを哀しさを寂しさを伴いながら
私の心を押しつぶそうとしています
誰か
誰でもいいから
私を助けてください
このままでは
私は生きていけそうにないのです
辛いから
哀しいから

寂しいから
貴方をまだ想っているから
サヨナラのその四文字が
ずっしりと重たいのです
誰か誰か
お願いです
私をどうか助けてください
このままでは
私はきっと生きていけなくなってしまいます
私は強くなんてないのです
誰よりも弱い生き物なのです
どうかどうか
助けてください
私にあの四文字を残していった
貴方の心のように

私の心を軽くしてください

誰か・・・誰か・・・

さよなら

貴女ですか？
サヨナラという四文字の
寂しい重さに
押し潰されようとしているのは

貴女ですね
必死に生きていこうとしているのに
その場から立ち上がれずに
うずくまっているのは

その心の重さは
他人ごときがどうにかできるものじゃありません
貴女自身が強くなり
貴女自身で前を向いて立ち上がらなければいけません

だから僕はその手助けをしようと思います

どうでしょう？

サヨナラという冷たいその四文字を

さよならというやわらかい四文字にしてみては

何も変わらないと言ってあなたは嘆くでしょうか？

でも感じてください

さよならという言葉の方が

暖かくて、優しくて

サヨナラなんてものよりも

ずっとずっと軽いでしょう？

あとは貴女の心しだいです

辛くても哀しくても

どうかその壁を乗り越えてください

人生に別れのない道なんて
哀しみのない道なんてあるはずもないのです
僕はここで貴女を見守っています
貴女が前を見て歩けるようになったら
貴女の傍らで
貴女のとびきりの笑顔を見せてくださいね

再会

貴方に再会して
私はとても嬉しかったの
連絡を取るすべなんてない貴方とは
もうこのまま一生会うことは出来ないと思っていたから
貴方に会って一緒に話したとき
昔に戻ったみたいで
すごくすごく
嬉しくて幸せな時間でした

貴方に再会して
私は嬉しさの反面とても悲しくなったの
昔に戻ったようだと思っても
今が昔に戻るなんてことはありえないから
貴方の隣で笑いあうことはもう
私には許されないこと
それがとても
哀しくて心が裂けそうでした

貴方は私と再会して
どう思ったの？
会わなかった間
少しでも私を想ってくれた？
一緒にいたいと思ってくれた？
私と同じように？
ずっとずっと

こんな私を忘れないでいてくれた？

貴方は私と再会して
これからどうするのかな
いろんな世界を見て
いろんな人と会って
幸せになってくれるかな？
私を忘れて貴方が幸せになるなら
はやくはやく
私を忘れて歩いていってください

貴方と再会したから
捨てたはずの気持ちが戻ってきそう
貴方との日々は私にとって幸せすぎたから
貴方の背中を追いかけたくなる
貴方のことを忘れらなくなる
このままだと
貴方のことをまた傷つけてしまう
なのになのに
貴方と離れたくない
また一緒に居たい
願ってはいけないことなのに
願っても叶わないことなのに

もしも…もしもね
貴方との再会が
ほんのもう少しだけはやかったなら

奇跡のような
貴方との再会まで
私がもっと強く生きれていたなら
もしかしたら
今という現実は無くなって
違う未来が誕生していたのかな？

・・・なんてね。

足跡

満ち潮が来る前に
二人で砂浜を散歩しましょう
私たちが歩いた足跡を見つけた人は
きっとその足跡を
辿ってみたくなるはずです
はずんでいる足跡
走った足跡
ステップをした足跡
交差していく足跡
たくさんの点々とした足跡は
二人の幸せへと続いていきます
もしも日が暮れて
私たちの足跡が消えてしまっても
この砂浜の上を端から端へ

はずみながら
走りながら
ステップを踏みながら
交差しながら
二人で散歩したこの胸の熱いほてりは
心地いい潮風の中に漂います
そしてその場所は
二人の愛の記憶の１ページとなるのです

私

ワタシはわたし
誰のものでもない一つの生命(いのち)
誰にも振り回されない絶対の意志
誰かを救える強い優しさ
人の幸せを喜べる清らかな感情
何色にも染まることのない汚れなき心
誰も傷つけないという誓い
たくさんの宝物を両手に抱え
この地に産まれた
それが私

生を受けた日から
数年の月日が過ぎました
『私』が持っていたたくさんの宝物は全て失われてしまいました

誰かの物でしかないちっぽけな生命(いのち)
誰かの言うことに振り回される軟弱な意志
自分が大切で何も出来ない冷酷さ
すでに黒く汚(よご)れてしまった汚(けが)れた心
誰かを傷つけることでしか満たされない心の闇
そんな宝物の成れの果てを
今も大事に抱え込み
この地で生き続けている
それがワタシ

ワタシはもう疲れました
すでに輝きなどない宝物を捨て去り自由になりたい

しかし、それは出来ません
不必要なその宝物は
ワタシのなかに眠る
本来の『私』の欠片だと知っているからです
いつか
この宝物の埃が綺麗に掃われる時が来たら
『私』に戻れるかもしれないと思うと
それを捨てることがきません
そのいつかまで
泥沼のような腐ったこの場所で
ワタシは行き続けなければ行けません
それが純粋な『私』を汚してしまった
ワタシの罪なのです

『きみ』はまだ『君』でいることが出来ていますか？

ありがとうを君に

いつも言いたかった言葉があったんだ。
言おうとしても、気恥ずかしくて言えなかったんだけど。
今では言えなかったことを後悔してる。
俺の気持ちを伝える前に
君は俺の元からいなくなってしまった。
誰の元からもいなくなってしまった。
言いたかった言葉を伝える前に
伝えられなくなってしまったから。

今更俺の気持ちが君に届くなんて思ってない。
君に俺の気持ちが届けられるかなんてわからない。
だけど、君に届けたい。
君に伝えたい。

『ありがとう、俺と友達になってくれて。
ありがとう、一緒に笑ってくれて。
ありがとう、一緒に泣いてくれて。
ありがとう、こんな俺を好きになってくれて。
ありがとう、『愛』という感情を教えてくれて。
君がいたから、俺は強くなれた。
本当に、ありがとう』

遅くなった『ありがとう』を
離れてしまった君に。
どうか、届きますように。

幸せの定義

幸せって何だ？

裕福な暮らしをすること。

人気になってちやほやされること。

友達が人より沢山いること。

それって本当に幸せ？

裕福な暮らしをすること。

金の力で幸せって手に入るものなの？

人気になってちやほやされること。

それは本当の俺を見てくれてるの？

友達が沢山いること。

俺の周りにいる人たちは本当に友達って呼べる？

本当の幸せはとても小さなもの。
気づいた人が幸せになれる。

俺の幸せは今。
極ありふれたいつもの日常にいられる今。
笑うことが出来る今。
泣くことが出来る今。
君の隣にいることが出来る今。
それが俺の幸せ。

幸せの定義
それは極ありふれた小さなもの。
誰も気づけずにいる小さなもの。
たとえばそう。

今この時間に生きていること。

変わる心

人の心は季節
愛し合っていた私たち
そんな私たちの間に吹いた
優しい優しい春のそよ風
貴方の心は季節のように
そよ風とともに変わってしまった

貴方の愛
そんな目の見えないものを引き止めるには
これ以上なにをすればいいのでしょう？
天に昇ったまばゆい太陽が
遥か遠くへ沈んでしまうのを
美しく咲いた可憐な花の花びらが
静かに散ってしまうのを

誰が止めることができたでしょう？

季節と共に

私の体を通り過ぎた愛の気配

せめてこれを

私の胸の中にとどめておきましょう。

人の心は季節

吹雪が吹いている私の心を

暖めてくれる人は誰でしょう？

貴方と同じように

私の心が変わってしまうのはいつでしょう？

私の心は

春から冬へ

吹雪は一向にやみません

だから

幸せの中にいるときは
気づかないものなんですね
すぐ隣に
涙が忍び寄っていることなんて

青空のように限りない幸せがあるから
海の底のように深い悲しみがあるのです

だから
ほんの少しだけ

幸せの世界の中で
立ち止まってみましょう

悲しみの中にいるときは
気づけないものなんですね
すぐ後ろで
笑顔が待ってくれてることなんて

今日が終われば明日が来るように
涙が乾けば笑顔になるのです

だから
ほんの一瞬だけ

悲しみの世界を
振り返ってみましょう

幸せと悲しみは
いつも背中合わせです
笑顔と涙が先を争って
心の中にお邪魔しようとしています

たくさんの笑顔と
たくさんの涙は
この世界にちょうど半分

だから
ほんのひとときだけ

幸せの世界で
悲しみの世界で
悲しみと幸せを
感じあってみましょう

好きでした

好きでした
ずっとずっと好きでした
初めて会ったときから
貴方は大切な人になりました

好きでした
とてもとても好きでした
共にすごした日々は
色褪せることなく輝いています

好きでした
悲しいくらい好きでした
近づけば近づくほど
心は離れてしまいました

好きでした
本当に本当に好きでした
これが最後になるかもしれないと
心が悲鳴を上げています

好きでした
心の底から好きでした
いままでありがとう
優しさを
幸せを
愛を
記憶を

思い出を
ありがとう

好きでした　貴方が

好きです。　貴方が。

朝

空気が冷たい冬の朝
重いまぶたを持ち上げる
飛び込むのはカーテンから見える仄かな光
胸を満たすは朝の澄んだ空気
体を包むは隣のあなたの体温
静かに寝息を立てている頬にキスを落とし
抱きしめている腕からそっと抜け出す
暖かさが冷たさに変わる
それはまるで
帰る場所を見失った迷子の子供のように
不安と寂しさをぶつけてくる
カーテンのかかった窓に立つ

ゆっくりとした動作でそれをひく
目に映るのは暗闇の中の仄かな光
暗闇に映えるは小さな希望
未来を照らす大きな光
背後で揺れる気配に気づいてそっと振り向く
幸せな夢を見ているような顔のあなたと視線が絡む
夢はいつか現実へ
『おはよう』
今と幸せを紡ぐあなたとの時間
今日も夢のような一日の始まり

寂しい

貴方を愛してしまったから
寂しいのでしょうか

それとも

寂しいから
貴方を愛してしまったのでしょうか

貴方へ会いに行きたいです
出来ることなら今すぐに
でも
私にそんな勇気はありません
心が
会うのが怖いと
叫んでいますから

貴方は私の想いを知りません
だから早くこの想いを伝えたい
だけど
出来るはずがありません
恐れているのです
気持ちを伝えて
関係が
壊れてしまうのではないかと

貴方は今誰を見ているのでしょうか
私の向けるまなざしと同じまなざしで
誰を見ているのでしょうか
この想いを伝えたら
この関係はどうなるのでしょうか

伝えたい
この想い
伝えられない
貴方への想い

貴方を愛してしまったから
寂しいのでしょうか

それとも

寂しいから
貴方を愛してしまったのでしょうか

答えはまだ
みつからない

過去

遅かったんだ
君と出会うことが
途方もないくらいに
遅すぎたんだ

なのに
君を忘れることが出来ない

君の仕草
君の体温
君の口癖
君の笑顔

すべてが
君を忘れる邪魔になる

もっと早く
君と出会いたかった
まっさらな俺で
君に出会いたかった

だけど
もう過ぎた過去の話

後悔するこの記憶は
きっと忘れられない
後悔する過去だというなら

記憶の中に埋めてしまおう

君を忘れること
今のこの苦しみから逃れる
唯一の方法

俺は忘れたい
今ある苦しみから逃れたい
その思いとは裏腹に
心は願う

どうか
君のことを忘れませんように

間違い

この世界は間違えることばかり
すべて間違いだったんです
貴方と出会ったことも
貴方を愛してしまったことも

この広くて小さな世界で
貴方に出会いました
暖かな春の日差しのような
貴方でした
寒くて寂しくて凍えていた私を
いとも簡単に溶かしてくれた
優しい春風のような
貴方でした

だからでしょうか

有限を知らなかった私は
暖かな春の日差しの近くにいたせいで
季節が変わることを
優しい春風のせいで
風が冷たくなることを
忘れてしまっていました

もし
貴方が私のせいでまだ悩んでいるのでしたら
どうかすぐに忘れてください

この限りある時間を
貴方とともに過ごしたい
一分一秒でも長く
貴方の隣にいたい

そんなことを思っていた私を
すぐに消去してください

だって

貴方と出会ったことも
貴方を愛したことも

すべては
間違いだったのですから

選択

『好き』
そう言えたならどんなに楽だろう。
君が僕のものになってくれたら
それはどんなに幸せなことだろう。

だけど、怖いんだ。

たった二文字に詰め込む
僕の気持ち。
君に届いても
君に届かなくても
きっと僕たちの関係は壊れてしまう。

壊れるくらいなら
今のままで。
気持ちを隠して
君の隣へ。

だけど、伝えたい。

変わらない関係なんて
この世界にない。
僕が何かをしても
僕が何もしなくても
この関係は壊れるだろう。

壊れるのなら
変えようか。
気持ちを曝け出し
その先へ。

ぐるぐる回る
選択肢。
『変える』
『変えない』
その二択。

だけどこの世界の中で
きっと一番難しい二択。

僕はどちらを選べば
幸せを手に入れられるのだろう。

『好き』
そう言えたならどんなに楽だろう。
君が僕のものになってくれたなら
それはどんなに幸せなことだろう。

『嫌い』
そう思えたらどんなに楽だろう。
僕が君を想うことがなくなるのなら
それはどんなに哀しいことなんだろう。

前へ

桜が咲いた
満開の桜だ
小さなその花びらが
僕たちの制服の上に落ちてくる
買ったばかりの制服は
なんだか少しだけ大きい

花びらのシャワーを浴びながら
僕たちは歩く
隣には君
一番大切な
僕の親友

この先には
何が待っているのだろう

小学校とは違う
新しい世界へ
僕たちは駆け出した
桃色の絨毯の上を
笑いながら
期待を胸で膨らませて

満開の桜は
僕たちを祝福している
あと3回
満開に咲いた桜を見るとき

僕たちはどうなっているのだろう

大人が言う
『大人』に近づいているのか
そのとき僕は
どんな僕なのだろう

見に行こう
これからの未来を
君と一緒に
ゆっくりと、前へ。

合図

太陽が顔を出した。
温かい横顔。
それは始まりの合図。

ぽかぽか陽気。
流れる時間。
貴方の隣。
始まりの音。

歩いて
走って
進んで
進む。

始まる。
ここから。

誰かが泣いた。
悲しみの横顔。
それは終わりの合図。

ぽたぽた涙。
止まった時間。
貴方の隣。
終わりの音。

歩いて
歩いて
歩いて
止まる。

終わる。
全てが。

虹が架かった。
雨上がりの空。

それは
それは。

始まりと終わりの
相対の合図。

キラキラ架け橋。
七色滑り台。
貴方の姿。

聞こえる音。

今日もどこかで
始まり
終る。

パレット

パレットに出した
空の色
合わせてみたら
どんな色になるのでしょう

真っ青な空と真っ白な雲
二つの色を合わせたら
水色の雨が出来ました

夜空の黒と雪の白
二つの色を合わせたら
灰色の雨雲が出来ました

太陽の赤と満月の黄色
二つの色を合わせたら
オレンジの夕日が出来ました

今度はもっと色を増やして
パレットの上に
世界中の光景
合わせてみたら
何が出来上がるのでしょう

木漏れ日と静かな歌声
合わせてみたら

優しいそよ風になりました
流れる涙と一人の空間
合わせてみたら
苦しい寂しさになりました

はじける笑顔と温かな体温
合わせてみたら
幸せな時間になりました

今度はもう少し色を減らして
パレットの中に
私と貴方
合わせてみたら
どんな未来が待っているのでしょう

水色の雨と優しいそよ風
二つを合わせた
変わらない未来

灰色の雨雲と苦しい寂しさ
二つを合わせた
冷たい未来

オレンジの夕日と幸せな時間
二つを合わせた
あたたかな未来

もっと色を増やして
もっと色を減らして
パレットを片手に
貴方と私
たくさんの未来を描きましょう

小さな手

ずっと手を伸ばしてました
遥か遠くにいる貴方に
私の小さな手が届くわけないと
分かっていたけど手を下ろせずにいました

だからあの時本当に驚いたのです

私の伸ばした手の指の先に
貴方の着ていたシャツの裾が絡みついたこと

ずっと遠くに思っていた貴方が
私の隣で手をつないで一緒に歩いてくれたこと

ずっと手を伸ばしたままでした
遥か遠くへ行った貴方に
一度離れてしまった私の小さな手がもう届かないと
理解していたのに下ろすことが出来ませんでした

だから私は自分の愚かさに泣きました

私の小さな手の指の間から
風のような貴方が通り抜けて行ってしまったこと

それでもなお

貴方を思い続けて手を伸ばし続けていたこと

今日この手を下ろします
背中を向けて去っていった貴方から
別に吹っ切れたわけじゃありません
ただこの恋を続けるのはこの恋にとても失礼
だからこれから私は未来(そら)を見ます

まだ貴方を思い出に出来るかわからないけど
前に向かって歩きます

少しだけ胸が痛いし無理やりだけど
こんな前への進み方もきっといいよね

たくさんの時間が流れて
また私たちがこの街のどこかで会ったなら
一緒に笑って
最後に手を振ってお別れしたいね

貴方への花束

まだ私の隣に誰もいなかったとき
私はいつか始まる自分の恋を
今か今かと待ち焦がれて
一束の山茶花を買いました

山茶花は静かに
私に向かって微笑みました

貴方と初めて言葉を交わしたとき
私は胸の中に生まれた幸せを
優しく優しく包み込んで
一束のスミレを買いました

スミレは笑って
私の心を温かくしました

この想いが恋だと気づいたとき
私は自分の中のこの気持ちを
大きく大きく育て続けて
一束のアガパンサスを買いました

アガパンサスは得意気に
私に向かって頷きました

自分の想いを伝えたいと思ったとき
私は熱くなり続けるこの愛を
綺麗な綺麗な花に託して
一束の薔薇を買いました

薔薇は元気に
私に勇気をくれました

大好きな貴方に会いに行くとき
私という小さい真っ白な花を
恋という花束の中にそっと飾って
届けに行きます

私の小さな恋(はなたば)を
どうぞ受け取ってください

ことば

ふと周りを見渡せば
周りにあふれてるたくさんのことば

優しいことば
悲しいことば
嬉しいことば
切ないことば

ときには誰かを喜ばせて
ときには誰かを傷つける

ことばは薬で
ことばは毒薬

薬の効力は向けられた人にしか分からない
でも向けられた人は自分のことでいっぱいで
向けた人の気持ちなんて分からない

「大ッ嫌い」
そのことばが本当の気持ちなのか

「大好き」

その裏にある別の感情はなんなのか

周りにあるたくさんのことばは
透明で　不透明

あなたの持っているそのことばは
いったいどんなものですか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4422n/

詩の広場

2011年10月1日03時46分発行